

赤沼智善先生

——堅実なる学風の人——

舟橋一哉

一、大正から昭和へ

大正から昭和にかけて、その頃の大谷大学は発展途上にあり、活気に満ちていた。広い視野に立つ佐々木月樵師を新たに学長に迎え、「佛教学を世界に開放しよう」という遠大な理想を掲げて、そのために大谷大学は学問研究の充実に力を尽し、着々として実績を上げつつあった。それまでの佛教学はいわゆる宗乗・余乗といわれるものであって、そういう特殊な学問の領域内においてしか通用しない態のものであった。とくに余乗に属するものは、一口にいえば「八宗綱要」式のものであり、到底、近代学問の批判に耐えうるものではなかった。そういう因襲的なわくを超えて、佛教学の近代化をはかれたのが佐々木学長で、当時をかえりみてわたしは大谷大学の第二の黄金時代であったと思う（第一の黄金時代は、清沢満之師による宗門近代化の一環としての大谷大学巢鴨時代と見て）。赤沼師は実にこのよ

うな要請に応えて、大谷大学に初めて原始佛教学とパーリ語学の講義を開講せられたのである。その当時、大谷大学においては、梵語に泉芳環、チベット語に寺本婉雅の両師がおられ、パーリ語の赤沼智善師と

竝んで、聖典語学をそれ／＼担当しておられた。泉師は南条文雄師の直弟子で、とくにインド文学に関心を寄せておられたが、寺本・赤沼の両師はそれ／＼現地において（すなわち寺本師はチベットで、赤沼師はセイロンで）語学を学んでこられたのであって、いわば本場仕込みの語学であった。ということは、梵語に関してはその頃すでに東に高楠順次郎師がおられ、西に榊亮三郎師がおられて、日本における梵語学もある程度までは普及していたが、パーリ語とチベット語についてはまだそこまで至っていない、いわば創成期にあったのである。従って、パーリ語やチベット語を学習しようと思う者は、どうしても現地まで出かけて行かなくてはならなかった。

二、誠実の人

赤沼師の人柄を一語でもって言いあらわそうとするならば、「誠実の人」というのが一番びったりしているように思われる。飾り気がなく、お世辞を言われるというようなことは全くなかったが、それでいて心の温さを感じせしめられるような人柄であった。

教え子の世話も随分とせられ、わたくしなどもその恩恵にあずかった一人であるが、そういうことがあっても、当の本人にはあからさまにそのことを打ち明けしないで、蔭にまわっている／＼と気を配って下さった。後になってそれが先生の御尽力によるものであることが解って、恐懼感激したようなことも一再ではなかった。けれども、もしひとたび先生の信用を失ったら、その信用は永久に回復されることはなかった。そういうところにも、越後人特有の一種のねばり強さのようなものが感ぜられる人柄であった。

先生は明治十七年八月二十五日、新潟県長岡市上田町願浄寺に生れ、明治四十一年七月大谷大学本科を卒業せられた。翌年、山辺習学師とともに浩々洞同人となり、尚羊社を起こして新らしい佛教伝道に若い情熱を燃やした。

先生の一生を語る場合、山辺師とのコンビには大きな比重がかけられなくてはならない。ともに越後の産であるこ

と、赤沼師の方が二ツ年下ではあるが、ほとんど同輩であること、ともに積尊に関する研究を畢生の研究課題とすることにおいて、研究の分野が一致していたこと、などによって、あたかも影の形に沿うが如く、山辺師の活動の背後には必ず先生が控えておられ、先生の仕事についての最もよき理解者として、つねに協力を惜しまなかった人、それは外ならぬ山辺師であった。

二人は性格的には必ずしも一致しない、むしろ相異なる点が多かった。学問研究の方法論においてもそうであった。赤沼先生の学問は緻密で着実で実証的であったのに対して、山辺師の方は達意的であり、直観的であり、文学的であった。いったい学問する人間ほど私の強い者はいない。またそれでこそ自分の学問に精魂を打ち込むこともできるのである。だから学問人は、自分と異なる方法論をとる他の学問人に対しては、心情的に同調しかねる点が多い。それに対する批判は容赦なく厳しい。それが学界の常識である。そういう点からいうと、木村泰賢師と荻原雲来師と二人が協同して俱舍論の和訳を完成し、実に老大な註釈を附して国訳大藏經の一編として刊行せられたことは、破天荒な出来事である。この和訳はその後、国訳一切経に殆どそのまま受けつがれ、五十年を経た今日に至っても、多くの学徒を裨益せしめつつある。木村師の学風は山辺師に通ずる点があり、荻原師の研究方法は赤沼師に近い。とすればこの二人は或る意味ではあい反する学風の持ち主であって、こういう二人が仲よく一緒に一つの研究を分担して、お互いに自分の足りないところを相手によって補い、研究の完成に向って進んでいくということは、本当に麗わしい学界の美談である。

赤沼・山辺両師の提携と親交についてもそれと同じことが思われる。そこには何か、常識では説明のつかないような、越後人としての同じ型の血液が流れていたのであらうか。心の温まる話である。

三、代表的な二つの著作

赤沼先生の学風は、その代表的著作である「印度佛教固有名詞辞典」と「漢巴四部四阿含互照録」の上に顕著にあらわれている。いったい辞典とか目録とかいうようなものを編集する仕事は、多くの場合、大勢の若い研究者や助手を使い、編集費も充分に用意して、先きの見通しがついてからかかるものであって、編集責任者は最高責任者としての責めに任ずるということはあるが、実際の仕事は若い人たちに任せておくのが普通である。

ところが先生の辞典と目録（これを赤沼辞典、赤沼目録ともいう）は、全く独力で造られたものであって、この点世の辞典類・目録類とはその編集の事情が全く異なっている。赤沼辞典の方は、初めから辞典を造ろうという計画があったわけではなく、先生が原始経典を主としてその他の佛教聖典を、パーリ原典、漢訳にわたって読んでいくうちに、要点を抜き書きせられたメモがだん／＼たまってきて、その量は実に尠大なものとなった。そこでそれを項目順に配列して、一種の辞典の形式をとって出版したのがこの辞典である。初めは「固有名詞辞典」といわないで、「地名・人名辞典」というような名称にするつもりでおられたらしい。しかし佛名や部派名は人名ではないし、寺名までも地名にしてしまうのもどうかと思われるので、結局「固有名詞辞典」ということになった。そういうわけだから、これは辞典というよりは「説明文つきの索引」と言った方がふさわしいかも知れない。

たとえばいまここに提婆達多という人について、諸種の佛典の上にどのような記述が出ているかということが、それ／＼の佛典について知りたいと思えば、この辞典によって「提婆達多」という項目の下を見ればよろしい。そこには記録の内容にしたがって順次に提婆達多に関するいろ／＼な記録が、それ／＼出典を明示して出されている。パーリ語の典籍から引いたものはそれを和訳して、漢訳からのものは漢文のまゝで、更にそれらに著者の意見をも加えて記される。これだけの仕事を独力で完成されたということは、全く驚嘆のほかはない。いかに先生の学風が着

実で緻密でエネルギーに富んでいるかを知るよき一例である。とくにパーリ佛典については調査の範囲が註釈類にまで及んでいることは、注目すべき事実である。今日では、そういう註釈類に至るまで、研究の手がさしのべられるような態勢が整えられつつあるけれども、当時（昭和六年）としては実に劃期的な出来事であった。

「目録」の方は「辞典」の場合とは少しく事情が異なっている。辞典は全く先生の独創によるものであったが、「目録」はこれが出版せられるより以前に、不完全ではあるが一応のものは姉崎正治博士によって造られていたのである。赤沼目録はこれを訂正増補して面目を一新したという意味をもっている。これは原始佛敎の研究に携る者の、どうしても座右に備えなくてはならない書籍の一つであつて、これなくしては原始佛敎の研究は全くお手あげである。なぜならば原始佛敎の研究において、最も重要な位置を占めるものはパーリ語と漢訳とにおいて伝持されてきた阿含經であるが、この目録はその中で四阿含經について、パーリ原典と漢訳とを相互に对照させた目録である。つまり漢訳の阿含經を読んでいて、この阿含經に相当するパーリ語の原典を併せて見たいと思ふとき、それはどの經典に相当するかということが、一目ですぐわかるようにしたものである。もし相當のパーリ原典がないならば、ないということとが直ぐわかるし、また全同ではないが一部分一致する經典があるときは、そういうこともわかるようにしてある。逆にパーリ原典の方から漢訳を求めることもできるようにしてある。ただ惜しむらくは、パーリ小部についてはこの目録からはずされてゐることである。小部の中にはスッタ・ニパータ（經集）やダンマ・パダ（法句）のように、初期佛敎の教義を説明する上において重要な役目を担つてゐる經典が多数含まれてゐるが、それらについてはこの目録は殆ど役に立たない。しかしこれも、この目録が刊行せられた昭和四年という時代をかえりみると、致し方ないことであると思われる。スッタ・ニパータやダンマ・パダについての相當經典・異訳經典に関する研究は、今日では大きな進歩をとげて、昔日の面影はないが、これらの經典類の重要性が強調せられるようになったのは、実は余り古いことではない。せい／＼二十年そこ／＼である。ともあれ、この赤沼辭典と赤沼目録とが終戦后再び版を改めて出

版せられていることを思えば、これら両著の学問的命脈はまだくゞ尽きることはないと思われる。

四、遺稿集

先生がセイロンでニューニッサラ僧正に師事してパーリ語を学び、更にロンドンではリス・デヴィッツ博士夫妻について原始佛教の研究に従事し、前后四年有余の留学を終えて帰朝せられたのは、大正八年六月、ときに先生は満三十四才であった。ただちに真宗大谷大学の教授に任ぜられ、ここに初めて大谷大学において、原始佛教学とパーリ語学とが講ぜられることとなったのである。爾来、昭和十二年まで十八年間その間において大学紛争のために二年間長岡の自坊へ帰っておられた期間を除いて、満十六年間、大谷大学の教壇に立たれたのであったが、その歿后われ／＼門人たちの手によって三冊の遺稿集が出版せられた。「原始佛教之研究」「佛教教理之研究」「佛經經典史論」の三冊である。これらはいずれも、先生が大谷大学で講義せられたそのノートを整理したものと、それから各種の研究雑誌に発表せられた論文とがその中心をなしており、単行本としてすでに出版せられているものは原則として除外した。それらの中で「佛教教理之研究」に載せられている「佛教に於ける物と心」は、大谷大学で昭和九年から三年連続して講義せられたものであって、最後の講義に属するものである。それだけに先生が最も力を注がれた研究の成果であり、とくに南伝佛教の教義に関する研究は、当時としては全く未開拓の領域に属するものであった。

ここで一つ先生のために世の誤解を解いておきたいことがある。それは原始佛教における縁起説の理解に関連してのことであって、あたかも先生が伝統説の支持者であるかの如くに思われているようであるが、実際は必ずしもそうではないのである。そういう誤解は何に由来するかというと、大正十四年に「宗教研究」に発表せられた「十二因縁の伝統的解釈について」という論文である。この論文は決して伝統的解釈を無条件に支持せられたという内容のものでなく、伝統説に対して相当厳しい批判を加えておられるのではあるが、しかしその後発表せられた和辻哲郎博士

の「原始佛教の実践哲学」や、宇井伯寿博士の説（「思想」に初めて発表せられたのは赤沼師と殆ど同時で互いに相手の論文は見ていないと思われる）と較べるならば、赤沼師の説が伝統説を生かして考えていこうという方向に傾いていることは否定できない。しかしこの論文の題名が「十二因縁の伝統的解釈について」という、いかにも伝統説の支持者であることを宣言しているような印象を与える題名であったために、論文の内容に立ち入って検討するより前に、「赤沼は伝統派である」として、一も二もなく片ずけてしまいうきらいがなかったとは言えない。そういう点では論文の題名が先生の学説のイメージを変えさせた結果にもなった。

この論文は大正十四年の発表であったが、実は先生の縁起説についての晩年の考え方は「阿含経講話」の中にはっきり現われており、それは前の論文とは可成り違っている点があるのである。従ってわたくしは先生の最後の説は、この「阿含経講話」によらなくてはならないと考えている。この「講話」は「佛典講話」という叢書の中の一冊として出版せられたものであり、従って単行本の部類に入れるべきではあるが、しかし原始佛教の教義についての先生の晩年の考え方を知る上に、貴重な資料となるものであるから、という理由で、とくにこの遺稿集に収められたのである。そしてまたここに収められてある「阿含経講話」は、先生の手元に保存せられてあった該本の書き込みに拠って、縁起説に関する部分など、その他の部分をも併せて、訂正増補したところが少なくない。そうしてみると縁起説についての先生の考え方は、大正十四年の論文発表以後、二転三転しているわけであって、最後のものはここに載せられている「阿含経講話」である。そういう点でこれは大変重要な意味をもっていると考えられる。

五、晩年のことども

大谷大学の専門部（いまの短期大学部に相当する）で、先生が曇鸞の浄土論註の講義をせられたのは、昭和十二年四月からであった。これは先生がみずから進んで担当されたものであった、と聞いている。同じ年の十一月三十日に

はずでにこの世の人ではなかったのであって、従ってこの講義は未完成のまま遺稿集「佛敎教理之研究」に載せられている。いままで原始佛敎やパーリ原典の講義ばかり担当してこられた先生が、自分から進んで真宗学の講義を受けもたれたということは、先生の学問的関心の焦点が漸次変りつつあったということであろう。

先生の学問が原始佛敎・部派佛敎から、やがてそれらをふまえての上の真宗学へと、大きく方向轉換をしようとしておられたことは想像にかたくない。ところが惜しむべし、その年の十一月三十日には奇禍がもとで、ついに満五十三才を一期として、あわただしく逝ってしまわれた。自坊の土蔵を修理していて、その現場を見回りにいかれたとき、落ちてきた一塊りの土を頭部に受けて負傷し、それがもとで腎臓をいたため、尿毒症を併発して、ついにそれが命となりとなってしまったのである。

先生の学問は一面において極めて緻密ではあるが、また他面において視野が広く、大きく把えて大綱を失わない、という点があった。日本における佛敎学の現状が、もっぱら実証的な教理史学に偏していることを慨歎せられて、「佛法の興隆に直結するような佛敎学の樹立ということ、これからは考えていかななくてはならない時に来ているのではないか」という意味のことを、しみじみとした調子で筆者にもらされたことがあったが、そのときの記憶は今でもたくしの脳裏にはつきり残っている。もし先生に貸すに更に十年、二十年の寿命をもってするならば、おそらく広い佛敎学的視野に立っての真宗学の樹立、ということも可能であったのではないか、と思う。

先生は阿舎経の「嶮難世平等」の文が随分お好きであつたらしく、めったに筆をおとりになることはなかったが、この五字は幾度も書いておられるようである。そして傍らに *carati visamaṃ samāṃ* とデーバナーガリーの書体で書いて添えられたものが残されている。「矛盾と争剋に満ちたこの世をのりこえて、平安の境地に至るべく佛道を歩む」という意味であるが、これこそ先生が一生涯をかけて追求せられたものであつたのであろう。佛敎学の研究も先生にあってはこの埒外のものではなかった。

曾って学友のS君から聞いたことであるが、あるときS君が学生時代に先生のお宅——その頃は大谷大学の南西四百メートルほどのところ、中溝町にあった——を訪問した。談たまたま佛教的人生觀の問題に触れてきたが、S君は原始佛教の立場から、日頃教えられてきた通り、「人生無常の道理を諦観すれば、常もない無常もない」と堂々の論陣をしいて先生につめよった。しずかにS君のいうことを聞いておられた先生は、ただ一言「君にはその無常の道理が諦観できるかも知れんが、僕にはそれができないんだ。そのためにこそアマミダの本願があったのではなかったか」と言われた。そしてその後はただしずかに称名念佛しておられるようであった、と。わたくしは先生の一面を語るものとして、忘れることができない。

法名は樹心院釈智善。奥様は現在長岡市の願淨寺にお住いである。